

産学連携が鍵 男性のニーズ見極め

1915年の創立から110年の節目を迎える名古屋女子大学(名古屋瑞穂区)が、4月から男女共学となり、名称も「名古屋葵大学」に変わる。新しい船出に合わせて新学長に就任する杉本八郎さん(83)に目指す大学像などを聞いた。



東一・はちろう 東一製薬会社「エーザイ」の創業第一研究所の元所長で、1997年に世界初のアルツハイマー病治療薬「アリセプト」を開発。翌年には薬のノーベル賞と賞称される英国のガリアン特別賞を受賞。京都大学や同志社大学で教授を歴任。

4月から男女共学 名古屋葵大の新学長に聞く



名古屋女子大学では名古屋葵大学に愛称になることを知らせる看板が設置されている(名古屋瑞穂区)

名古屋女子大学 1915年に名古屋女学校として創立。64年に名古屋女子大学が開設される。現在は健康科学部など4学部6学科で管理栄養士や看護師、保育士などを養成している。

——学長就任の経緯を教えてください。
2023年に大学の運営法人である越原学園の理事に就き、同年10月から法人に新設されたヘルスケア研究所の所長を務めています。就任時にはすでに学校の共学化が決まっていたので、私に「新しい学長候補を紹介してほしい」と依頼がありました。適任者が見つからず、最後は「あなたがなつてよ」と頼まれ、引き受けることにしました。責任の重さを感じるとともにやりがいもあると思っています。

——男女共学に踏み切ったのはなぜでしょうか。
越原学園は創立以来一貫して女子教育を担ってきました。しかし、近年はジェンダーレスが進み、共創社会の実現が求められています。性別を問わず個人が活躍する社会の現状を踏まえれば、男女共学は当然の流れで

あり、社会的なニーズも大きくなっていきます。少子化を考えると男女共学のほうが学生を集めやすくなると思います。
——名古屋葵大学の強みは何ですか。
健康栄養学科で管理栄養士を長年にわたって養成してきましたが、医食同源という社会ニーズには応え切れていなかったのではないのでしょうか。これからは、私が所長を務めるヘルスケア研究所の蓄積を生かし、サイエンスの観点から食にアプローチできる新コースの設置を検討しています。

私の専門でもある認知症を根本から治す薬は、現在のところありません。しかし、これまでの研究から、認知症と生活習慣病は密接な関係があることが分かっています。食生活を変えれば、認知症は予防できると確信しており、産学連携に力を入れていきたい。
——目指している大学の像は。
私個人としては、男子学生を受け入れたばかりの最初の1、2年は、「男性」を重視する姿勢で臨んでいきたいと考えています。産学連携の拠点となるヘルスケア研究所にも積極的に男子学生を誘っていききたい。看護師や管理栄養士などは、男性が目指す職業のトレンドにもなりつつある。男性のニーズを見極め、葵大学で学びたいという環境を整えることが私の仕事です。

——男子学生を獲得するために何が必要ですか。
まずは実績です。4年後に卒業する男子学生が、どんな企業に就職したかです。それには産学連携が大きな鍵を握っていると考えます。自分の中では男子の就職率100%が目標です。名古屋女子大には伝統も実績もある。その伝統を守りながら、新しい伝統をつくりあげなければなりません。
——産学連携にこだわっている理由。
葵大学としての知名度

を上げる一番の近道だと考えます。私学なので収益も挙げなくてはならない。例えば、2年前に私は「脳が喜ぶスープ」を開発しました。認知症予防のためのスープです。これをヘルスケア研究所で商品化したい。スープだけでなく、認知症予防の弁当の開発もしたい。これは管理栄養士を養成してきた大学の蓄積が生かせると思っています。

——ほかに考えている新たな取り組みは。
大学には災害時の食事や宇宙食を専門に研究している教員がいます。認知症予防の食事と合わせて産学連携で商品開発を進めていきます。地域社会との関わりや産業界と連携しながら、世の中に役立つ人材を育て、社会に貢献していきたいと考えています。

(松永佳博)